

—特集「肥満症治療の最前線 (1)」—



「肥満症治療の最前線」の特集にあたって

岩部 真人

日本医科大学大学院医学研究科内分泌代謝・腎臓内科学分野

肥満がもたらす健康への影響は多岐にわたる一方で、その治療においても様々なアプローチが求められています。わが国において肥満症という概念が提唱されたのは、2000年に日本肥満学会を中心に行われたことが契機でした。従来、肥満者の治療対象は体格指数(BMI)のみに基づいて定義されることが一般的でしたが、日本ではそれに加え、内臓脂肪の蓄積や健康障害の有無に基づく診療の必要性が強調されるようになりました。この考え方は、国際的に見ても当時非常に先進的なものであり、肥満症治療の新たな基準として広く受け入れられてきました。

以降、肥満症診療におけるガイドラインが各学会より整備され、診療現場における肥満症への取り組みは大きく進展しています。肥満症の治療には多面的なアプローチが必要であり、患者ごとの個別性に応じた適切な治療法を選択することが求められます。今回の特集では、肥満症治療における最新の知見や臨床的アプローチについて、各分野の最前線でご活躍されている専門の先生方にご執筆いただきました。

まず、内分泌代謝・腎臓内科学分野の稲垣恭子先生からは、「肥満の健康障害」というテーマで、肥満が内臓や全身におよぼす健康リスクについて幅広く解説し

ていただきました。小林俊介先生からは、「肥満症の食事療法」をテーマに、栄養管理と食事介入の具体的な方法が取り上げられています。さらに、羽田幹子先生からは「肥満症の運動療法」、大塚英明先生からは「肥満症の薬物療法」について、それぞれ治療法の意義と実践が紹介されています。また、精神神経科の松本有紀子先生からは、「肥満症の行動療法」において生活習慣や行動変容の重要性が強調されています。外科的アプローチとしては、消化器外科の中田亮輔先生から、「肥満症の外科療法」に関する解説があり、手術による治療の最新技術と成果が言及されています。さらに、分子遺伝医学分野の酒井真志人先生からは、「代謝異常関連脂肪肝炎におけるマクロファージ研究の最前線」と題して、MASH (metabolic dysfunction-associated steatohepatitis) におけるマクロファージが疾患特異的な形質を獲得するメカニズムに対するアプローチを最新の研究成果を交えつつご紹介いただきました。

肥満症治療は、単なる体重減少を目指すものではなく、全身の健康を維持し、合併症を予防することが重要です。今回の特集を通じて、国内の肥満症診療における最新の知識と技術が広まり、診療科を超えた協力がますます深化することを期待しております。